

清末小説から 91

2008.10.1

『劉鶚集』はよろしい.....樽本照雄 1

莎士比亞在1916年前的中國.....郝 嵐17

晚清小説作者扫描(拾陸).....武 禧24

清末小説から24 / 26

阿英までも林紆に濡れ衣を着せている。錢玄同と劉半農がはじめたのが1918年のことです。陳独秀、胡適、鄭振鐸、周作人、魯迅という人々が林紆批判を決定づけました。林紆冤罪も本年で満90年。これはなんでしょうねえ。『清末小説』第31号は近日発行予定です。時間が早罝

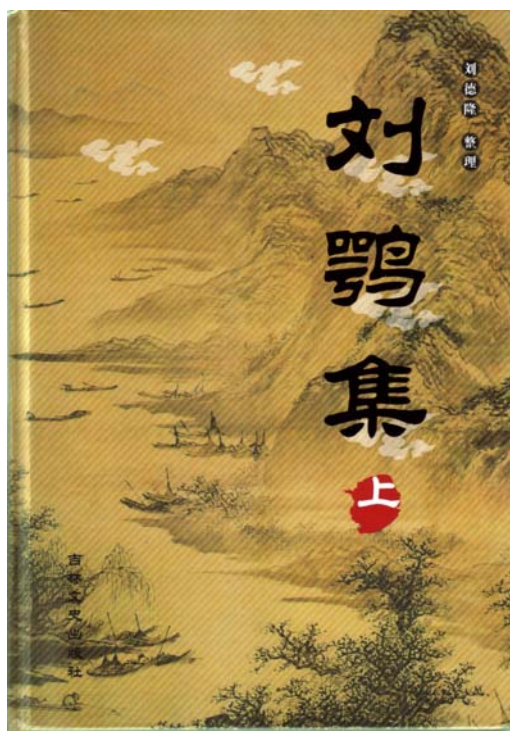
清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

『劉鶚集』はよろしい

樽本照雄

劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』上下冊(長春・吉林文史出版社2007.12)が出版された。

劉鉄雲の著作(一部、父成忠の文章を収める)を集め、本文のみで合計1,538頁だ。巨著というのがふさわしい。上製2冊本。装丁は絵図と濃緑色の2種類があ



(劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』/本誌前号でも書影を掲げた。もう1種類の装丁は印刷すると真っ黒になるので省略する)

る。

劉鉄雲という存在

私の興味の中心は、「老残遊記」とその著者である劉鉄雲だ。どうしても、その角度からの紹介になる。このことを最初におことわりしておく。

わざわざこのような言いわけをしなければならないのは、劉鉄雲という人物が小説作家という枠をはみだした存在であるからだ。彼個人にしてみれば、小説を書いたのは、全活動の中でわずかな部分しか占めてはいない。

著作類だけで黄河治水、数学、薬学、金石文、音楽など多方面にわたる。文字にならない実際の活動は、これを上まわる。一般には、『鉄雲蔵亀』の劉鉄雲だといった方が有名かもしれない。

そういう劉鉄雲を知ると、彼の書いた小説「老残遊記」について不満を感じるのが正直なところだ。劉鉄雲は、小説については素人なのである。そのことを「小説作家という枠をはみだした存在」と表現している。

劉鉄雲が行なった実際活動のうちのごく限られたものが、小説「老残遊記」で触れられる。

黄河治水にしても、小説に書かれているのは少しだけだ。それだけのこと。だが、彼の体験をもっと具体的に書き込めば相当に違ったものができたのではないか。劉鉄雲の治水論を検討して鄭州の黄河を視察したことがある私は、そんな感想をいだく。

劉鉄雲が手がけた鉱山開発、鉄道建設、

北京における難民救済活動、2度にわたる日本訪問、塩の買い付け事業、音楽（小説に一瞬出現する）、金石文字、太谷学派（小説に少し出てくる）などなどいくらでも小説の題材はあったはずだ。ところが、彼の豊富な経験と知識が、「老残遊記」に十分には反映していない。小説の専門家であれば、まさに虚実をとりまぜて自分の体験を作品にこれでもか、と盛り込まないわけがないのだ。しかし、それがない。小説作品はわずかにひとつしか書かなかった。それを見ても彼は小説に素人だったといわざるをえない。李伯元、吳趸人、曾孟樸たちと並列すれば、経歴にしても劉鉄雲だけが異色なのである。

劉鉄雲の豊富で広範囲な文筆活動を前にして、私の手に余る部分の方が多い。紹介をする適任者がそれぞれの分野にいると考える。

ということで、私は、あくまでも「老残遊記」を中心にしてこのたびの『劉鶚集』をながめるといふ意味だ。限定されたものであるとご了解いただきたい。

劉鉄雲に関する従来資料集は、清末小説としての「老残遊記」が中心となっていた。

老残遊記資料2種

たとえば、以下の2種類がある。刊行順にa bの記号を割り当てる。

a 魏紹昌編『老残遊記資料』北京・中華書局1962.4（采華書林影印あり）

b 劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老

残遊記資料』成都・四川人民出版社
1985.7*1

この資料集2種類の刊行を経て『劉鶚集』が登場する。目次を別にかかげ、比較のために重複する文献にa bを記す。

見れば以上の3種類で重複する部分は、多くはないことがわかるだろう。劉鉄雲の詩は、新しく見つかったものが加えられている。編者劉徳隆が長年にわたって広く搜索した結果である。今後も出てくる可能性がある。

それぞれに特色があるから重ならない。

a 魏紹昌編『老残遊記資料』に見る特色は以下のとおり。

「老残遊記」初集二集の序および初集の評語を掲げた。

『老残遊記』は、以前から数多くの出版社が刊行している。ところが、版本によっては、もとからついているそれらの序、評語を掲載しないものがあった。だから、掲載することが新しかった。今では、序、評語を収録する単行本が当たり前になっている。ただし、例外がある。陳翔鶴校、戴鴻森注の人民文学出版社版は、初版の1957年から最近にいたるまで重版をくり返すが、評語を無視している。著者劉鉄雲の執筆ではない、と考えているのだろう。

さらには、「老残遊記」二集巻7-9(以下、回を使用)および外編残稿を収録した。

それまでは、二集といえれば前半の6回分しか流通していなかった。忘れられた3回分を手写本によって復刻したのが注

目される。ただし、手写本だから写し間違いがある。私はそれを知っており、すでに何度か指摘した。それができたのは、私が日本で天津日日新聞切り抜きの『老残遊記二集』を発掘したからだ。本文を比較対照して間違いがあることを知った。

該書所収の劉大紳「關於老残遊記」ほかに劉厚沢の詳しい注釈がほどこされていることも特色のひとつだ。つぎに紹介するb『劉鶚及老残遊記資料』に大紳論文は収録されてはいる。だが、注釈の点ではやはりa『老残遊記資料』収録のものが詳しいからそちらを見る必要がある。

蒋逸雪「劉鉄雲年譜」は、それまで彼が作成した年譜よりもかなり詳細だ。その理由は、劉蕙孫がa『老残遊記資料』のために準備した年譜を参照し大幅に取り入れたからだ、という。劉蕙孫の作成した年譜は、結局資料集には掲載されなかった。かわって蒋逸雪の年譜が収録された。この間の事情は複雑で、外部にいる私には理解できない。

該書成立について当事者間に紛争が生じたため、「文化大革命」終了後もa『老残遊記資料』は再版されることはなかった。そのかわり(かどうかは知らないが)出てきたのが次の資料集だ。

b 劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』の最大の特色は、劉鉄雲日記を収録したことだといっていい。

劉鉄雲日記は、その存在は以前からおぼろげながら知られてはいた。ごく一部が雑誌に掲載されたことがある。ただし、長い間公開されなかった。

清末の社会に生きて実業家としても活

動した劉鉄雲は、日常の記録として日記を書いた。交流した人の実名が出てくる。その中にはのちに負の評価を下された人物もいた。太谷学派関係者も含まれる。しかも、彼は外国人との交流があった。日本人が日記に多く登場する。ある時期の中国では、日本人と交際があるというだけで批判がおこる可能性が高かったのだろう。それが公表されると劉鉄雲の評価、あるいは子孫に政治上の悪影響をおよぼすと判断されたのではなからうか。政治と学術研究が結びついている中国ならではの事情だったと想像する*2。

わかりやすい例をあげよう。

劉鉄雲は鉱山開発を建議した。その際、外国資本を利用することを主張したのだ。当時においては、奇妙でも不思議でもない普通の方法だ。開発するための資金が不足するのであれば、外部から調達する。開発が成功すれば結果的には中国の財産になる、という考えだ。ところが、「自力更生」が叫ばれる時代には、それにあわせて過去の事実を裁断する。外国資本を導入するなどもってのほか、と批判の

対象となる。劉鉄雲は外国資本に国の資源を売り渡した「売国奴」というレッテルがはられる。ところが、「改革開放」の時代にかわれば、外資導入は積極的に行なわなくてはならない。すると劉鉄雲の同じ行動主張が、先進的な称賛すべきものへと変化するのである。「売国奴」から「愛国者」に評価が一変する。

政治を優先し、その時々「あるべき」結論に照らして過去の事実を裁断する。これが中国の学界の基本構造であるから、劉鉄雲の評価が不安定になるのは当然だ。評価の基準がぐるぐる動くから、必然的にそうなる。

「文革」が終了して10年近く経過した。劉鉄雲日記は解禁になったらしい。

珍しい日記ではあるが、誤植が多い。なぜ、それがわかるかといえ、私が受け取った版本には赤字で訂正されていたからだ。

該資料は、劉鉄雲の父成忠に関係する文献を収録した。また、「老残遊記」研究の論文を数点かかげる。太谷学派関係の文章を集めたのも画期的だった。

劉鶚著、劉徳隆整理『劉鶚集』目次（a魏紹昌編『老残遊記資料』所収 b劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』所収）

【上冊】本文776頁

戴逸「総序」1-3頁

劉徳隆「前言」1-12頁

総目録1-2頁

目録

河工類

恭録進呈《三省黄河全図》奏稿

恭録辦理三省黄河河道図説職名

三省黄河全図凡例

三省黄河河道一、二

三省黃河北岸堤工表

三省黃河南岸堤工表

三省黃河全囿北岸堤工高寬表

三省黃河全囿南岸堤工高寬表

三省黃河全囿北岸金堤表

述意十二條

三省黃河囿後叙(説明37-38頁)

治河五説(説明46頁)

歷代黃河變遷囿考(説明75-77頁)

b 河工稟稿(説明、附録83-84頁)

附録1: 劉成忠「河防芻議」

附録2: 劉厚沢英文原稿、劉德平訳「論歷代黃河之治理」(説明106頁)

算学類

孤角三術凡例

孤角三術卷首、卷上、卷下(説明146頁)

勾股天元草

天元勾股細草、卷上、卷下(説明168-169頁)

医薬類

温病条辨歌括(説明202頁)

要藥分劑補正(説明409頁)

文学類

老殘遊記 卷1-20 洪都百鍊生

a b 自叙

a b 自評

卷1-20(説明496-497頁)

附録: 老殘遊記(《繡像小説》本)目録(誤りがある)

老殘遊記《繡像小説》本卷之十

老殘遊記《繡像小説》本卷之十一

老殘遊記二集 卷1-9 鴻都百鍊生

a b 序

a 卷1-9(説明546頁。aは卷7-9のみを収録。aの誤りは訂正してある)

a 老殘遊記外編卷1(残稿)(説明550-551頁)

b 《鄰女語》評語(説明555頁。問題がある)

附録: 劉大紳「劉鶚所語之異事」(説明560頁)

劉鶚詩詞聯語

b 1、芬陀利室存稿(説明565-567頁)

b 2、東遊草(説明571頁)

b 3、抱殘守缺齋遺詩輯存与補遺(説明575、576頁)

4、劉鶚詩詞聯語零拾(説明577、580、582頁)

附録: 朱禧「《因齋詩存》過録、校勘記」

劉成忠伝

因齋詩存総目、序、卷1、2

批注題跋類

劉鶚閲読《老子》手記(説明623頁)

劉鶚批注、校勘《莊子》(説明626頁)

附録：朱松齡「劉鶚批注《莊子》淺析」

b 鉄雲碑帖題跋輯存(説明638頁)

劉鶚書画碑帖磚瓦当拓片跋銘(説明639、640、641、642、643頁)

抱残守缺齋珍藏碑帖(説明644、646頁)

抱残守缺齋中頭等碑帖(殘頁)(説明647頁)

抱残守缺齋書画碑帖目(説明654頁)

稟稿啓事類

石倉書局廣告(7則)(説明656頁)

b 劉鉄雲呈晉撫稟(説明658頁)

山西・河南・浙江“礦務合同”(説明663頁)

創辦大清銀行節略(殘稿)(説明665頁)

捐款声明(説明666頁)

b 礦事啓(説明668頁)

《鉄雲藏龜》、《鉄雲藏陶》出版廣告(説明669頁)

劉觀察上政務処書(説明673頁)

為与日本前駐天津領事鄭永昌訂立“合股經營遼東半島塩業合同”事致趙幾異稟(説明674頁)

b 風潮論(説明678頁)

国粹求沽告白(説明680頁)

劉成忠文五篇(説明684頁)

日記書信電文類

抱残守缺齋日記

抱残守缺齋・辛丑日記(現原件不存。説明691頁)

b 抱残守缺齋・壬寅日記(説明714頁)

b 抱残守缺齋・乙巳日記(説明737頁)

b 抱残守缺齋・戊申日記(説明743頁)

附録：關於《抱残守缺齋日記》

b 劉鶚書信電文(説明748、750、752、753、755、756、757、758、759、760頁)

附録：

劉鶚大事系年表(説明769頁)

b 劉鶚名、字、号、別名、筆名、綽名、齋名一覽

研究劉鶚的網站・著作・小説一覽

劉鶚佚詩十一首(説明776頁)

【下冊】は影印。本文762頁

古文字与金石類

鉄雲藏龜(説明2頁)

鉄雲藏陶(説明216頁)

鉄雲藏貨(説明288-289頁)

附録1：郭若愚「介紹劉鶚的未刊稿《鉄雲藏貨》」384-393頁

附録2：劉德隆、劉德平「刀布肩来滿一筐 苔花侵蝕古文章 劉鶚收藏古錢概述」

394-398頁

鉄雲蔵印(説明400-401頁)
鉄雲遺印譜(説明487-488頁)
抱残守缺斎蔵器目(鮑鼎輯)(説明495頁)
音楽類
十一弦館琴譜(説明594-598頁)
抱残守缺斎手抄琴譜(残稿)(説明718頁)

劉徳隆「後記」758-760頁
「写於《後記》之後」761頁
「付印前的幾句話」762頁

『劉鶚集』の全体

本書の特色のひとつは、劉徳隆による解題があることだ。別掲目次に「説明頁」と示したように各文献の末尾につけられている。それぞれの文献について書誌情報を説明しているのがよい。わざわざ指摘することではないかもしれない。資料集であれば、当然のことだ。

上冊の河工類は、すでに出版されているものを復刻する。

算学類、医薬類は、いずれも以前にまとめられていたらしい。私は、はじめて見た(「温病条辨歌括」については劉徳隆が事前に紹介している。『清末小説』第30号2007年)。見ただけで、内容を理解したわけではない。私の手には余る。

文学類の「老子」「莊子」関係文献は、今回はじめて活字になったのだろう。1987年に、それらが発見されたという新聞記事が出たという。その時、どこかの研究雑誌に公表されたかもしれないが、私は見る機会がなかった。

そのほか、新聞の出版広告、別の資料集から関連文書を収録して有用だ。

劉鉄雲日記について少し説明する。

該書には、解説文として「關於《抱残守缺斎日記》」が掲載されている。無署名だが、劉徳隆の書いたものと思う。

これによると日記は、このたび「抱残守缺斎日記」と命名された。前のb『劉鶚及老残遊記資料』では「劉鶚日記」と称していた。改名したことになる。

壬寅日記に「抱残守缺斎日記」と記されていることなどを根拠とする。わざわざそう書くのは、ほかの日記にはただ「日記」とだけ記されているからだろう(b『劉鶚及老残遊記資料』に写真が掲載されている)。

「抱残守缺斎日記」でかまわないが、長いので私は劉鉄雲日記と称する。

日記の保存経過については、以前とは説明が異なっている。『劉鶚集』で解説して劉厚沢の手紙を引用しているのでそうかと思うだけだ。それは置いておく。

重要なのは、今、目前にある劉鉄雲日記がどういう状態であるかを紹介することだと考える。

日記の旧暦日付に新暦が注記してあり便利になった。b『劉鶚及老残遊記資料』にあった誤植は訂正がすんでいる。

劉鉄雲日記は、以下のものがある。あるいは、あった。

辛丑日記(1901)行方不明
壬寅日記(1902)正月 - 十一月
乙巳日記(1905)正月 - 十月
戊申日記(1908)正月 - 三月

行方不明の辛丑日記は、再構成して収録された。その過程が興味深い。

劉蕙孫は、前出 a 『老残遊記資料』のために年譜を準備した。それを書くために劉鉄雲日記を手元に集めて必要部分を引用したのである。上にあげた4種類の日記は、その時は存在していた。年譜には、当然、辛丑日記からも取り入れている。ただし、劉蕙孫が必要だと考えた部分だけだ。たぶん、省略した箇所の方が多かったらう。

ところが前述のとおり、彼の年譜は、該資料 a には掲載されなかった。結局、『鉄雲先生年譜長編』(済南・齐鲁書社 1982.8)となって日の目を見る。年譜長編は、辛丑(1901)年も、事柄ごとにまとめて説明している。日にち順になってはいない。引用された辛丑日記も、記事は分散した状態だ。

私は、b 『劉鶚及老残遊記資料』掲載の劉鉄雲日記を見た。しかし、それには辛丑日記が収録されていない。説明もない。行方不明になったらしい。

そこで、『鉄雲先生年譜長編』に引用されている辛丑日記部分を集めて再構成した。それが、沢本香子名義の「劉鉄雲辛丑日記を再構成する」(『清末小説』

第9号1986.12.1)である。

辛丑日記部分を抜き出し、月日順に配列し直し注釈をつけた。私が強調したのは「今はただ本稿が、「つなぎ」としての役割を早く終わることを望むばかりだ」。すなわち、辛丑日記の実物が発見されることを期待した。劉蕙孫が取捨選択した部分以外を含めての全文が興味深かったからだ。

だが、『劉鶚集』を見ると、実物はまだ見つかっていないらしい。私がやったのと同じく劉蕙孫の該年譜から辛丑日記部分を抽出したものだ。私のほどこした注釈は採用されなかった。それと関係があるのかどうかは知らないが、b 『劉鶚及老残遊記資料』に収録した劉鉄雲日記につけていた注も『劉鶚集』では省略している。有用だっただけに残念だ。必要に応じて該書 b を参照するほかない。

『劉鶚集』は、辛丑日記について一歩前進した。だが、前にはつけていた注釈全部を排除したから一歩後退である。

下冊は、縦書きの原本を影印している。ただし、横組み用の左開きだから、縦書きページのつながりに最初はとまどう。慣れてしまえば問題はない。

気がついた下冊の誤りを指摘しておく。たいしたことではない。711-712頁と713-714頁が重複している。

『劉鶚集』の「老残遊記」関係部分

「老残遊記」部分について問題は、基本的にはない。

ただ、疑問に感じる箇所がいくつかある。

たとえば、496頁下部に「老残遊記」の執筆時間を説明している。

「初集は、1903年9月21日以前に着手し、1906年2月に終了した」

「1903年9月21日以前」とは、「老残遊記」第1回を掲載した『繡像小説』第9期の発行月日がそう明示しているからそこに基づくのだろう。それはそうだ。だが、「1906年2月に終了した」というのは、なにに拠ったのか不明。劉鉄雲が日本を最初に訪問したのは1906年2月だった。それからの推測かもしれない。そうであれば、注釈が必要だ。いずれにせよ確認できることではない。

同じく「老残遊記」二集は「1907年6月に着手した」の根拠が不明。

私は以前「天津日日新聞版「老残遊記」二集について」(『清末小説閑談』所収)において二集執筆時期を推測したことがある。1907年六月、あるいは七月以前である。理由は簡単だ。二集の『天津日日新聞』連載が七月にはじまっているからだ。劉徳隆は、それを読んだのかもしれない。あるいは、拠った資料が別にあるのかもしれない。どちらにせよ、断言するばあいは、根拠を示してほしい。

問題があるのは、「老残遊記」を最初に掲載した『繡像小説』についての解説なのである。

496頁13-14行に「『繡像小説』第9^{ママ}号(光緒癸卯八月初一日・1903年9月21日) - 18^{ママ}号(光緒癸卯十二^{ママ}・1914年1月 - 2月)。11^{ママ}巻を連載して中止[連載11巻而中止]」とある。

まず、『繡像小説』は、「号」ではな

く「期」を使用している。

『繡像小説』第18期には発行年月は記載されていない。それを注釈なしに書くのは不正確である。

また、「老残遊記」は原稿第11回が没書になったから劉鉄雲は執筆を中止した。前渡ししていた原稿第14回が第13回として掲載されて終わりだ。表面上の連載中止は、第11回(原稿第12回)ではない。書くとすれば、「13巻を連載して中止[連載13巻而中止]」としなければならない。

498頁には「老残遊記(『繡像小説』本)目録」を掲げている。

『繡像小説』第9期から第19期(ここでは「号」ではなく「期」を使用して正しい)まで、それぞれに1回ずつ回目を並べている。第19期(甲辰正月1904年2月)には巻11の回目がある。上に出てきた「18^{ママ}号」と一致しない。

前からいっているように、『繡像小説』は第13期から発行年月を記載しない。第13-19期に年月をいれるとすれば「推測」という注記が必要だ。「刊年不記」とするのがより正確である。

あらためて『繡像小説』の「老残遊記」掲載状況を示す。

第9期(癸卯八月初一日1903.9.21)

「老残遊記」第1回

第10期(癸卯八月十五日1903.10.5)

「老残遊記」第2、3回

第11期(癸卯九月初一日1903.10.20)

「老残遊記」第4、5回

第12期(癸卯九月十五日1903.11.3)

「老残遊記」第6回
第13期(刊年不記) 「老残遊記」第7回
第14期(刊年不記) 「老残遊記」第8、9回
第15期(刊年不記) 「老残遊記」第10回
第16期(刊年不記) 「老残遊記」第11回
第17期(刊年不記) 「老残遊記」第12回
第18期(刊年不記) 「老残遊記」第13回

『劉鶚集』498頁を自分の目で確認してほしい。劉徳隆は、『繡像小説』を見ているはずだ。しかし、このような大きな誤りがある。なぜ発生したのか不可解だ。

『繡像小説』の刊行が遅延している。この事実については、私は長年にわたって文章をいくつも発表した。だが、劉徳隆の『繡像小説』についての説明を読むと、やはり理解されていない。阿英らのいう定説が、いかに強固なものかよくわかる。

阿英の定説が研究者の思考をどれくらい束縛しているか。もうひとつの例を示そう。

「老残遊記」初集と二集の執筆に関する。

「老残遊記」初集は、『繡像小説』に連載された。原稿第11回が没書にされ、劉鉄雲は執筆を中止する(上に示した『繡像小説』第16期の「老残遊記」第11回は、原稿第12回に相当する)。のち、『天津日日新聞』に最初から連載をはじめることになった。没書にされた原稿第11回を復元し、第15-20回を加筆して『天津日日新聞』に連載した。これが初集20回だ。

阿英は、『天津日日新聞』の掲載終了

時期を「1904年」だと断定している。その翌年の劉鉄雲乙巳(1905)日記に、「老残遊記」の執筆が記録されているのが見える。こちらは当然「老残遊記」二集である(と信じられた。なにしろ阿英の断定がある)。二集の『天津日日新聞』掲載は1907年だ。私が日本で発掘したのが、この天津日日新聞切り抜き版『老残遊記二集』にほかならない。

劉厚沢(蕙孫の弟。徳隆の父)が疑問を提出した。「老残遊記」二集の執筆についての問題なのだ。

十月初三日に二集第11回を執筆し、翌初四日に第15回を執筆した。第12-14回はいつ書いたのか。1905年に二集を執筆して、その新聞連載が1907年であるのはなぜか。2年後というのは時間がかかりすぎている。

私は、以上の疑問について解答をだした。1976年のことだ。中国ではまだ「文革」が継続中だった。

誤解の原因は、阿英の断定である。彼は、初集連載完了を「1904年」だとした。それゆえ、劉厚沢は、劉鉄雲1905年日記にでてくる「老残遊記」は二集だと認識した。だが、阿英の断定した「1904年」にはなんの根拠もなかったのである。根拠もなく阿英は断言した、といわざるをえない。乙巳日記にある「老残遊記」第11回は二集ではなく初集の没書を復元したものだ。すでに『繡像小説』に掲載された原稿第12-14回(上の一覧表に見える「老残遊記」第11-13回として発表された)は書く必要がない。必要がないから日記には言及がない。日記に第15回から執筆

しているのは新構想にもとづく書き下ろしである。

簡単ないきさつだ。わかってしまえば、なんということもない。

私は、劉蕙孫に天津日日新聞切り抜き版『老残遊記二集』の複写を贈呈した。彼は、それを手元において『鉄雲先生年譜長編』の関係部分に加筆したと思われる。彼はどう説明しているか。

1905年の項目においてつぎのように書いている。「1905年」であることに注目されたい。

(32) 「老残遊記」二編若干を続作する

(乙巳日記からの引用は省略) 日本京都大学人文研究所所蔵の1905年乙巳七月初^マ[十]日『天津日日新聞』登載の「遊記二集」は第1回の開始である。執筆はすべて「二集」の回数^マを説明している。鉄雲氏の書いた「二集」は9回にとどまるものでないばかりか、14回で終わらない。14回というのは、亡父(劉大紳)の書き誤りの可能性がある。またのちに書いた別の「外編」を見ると、鉄雲氏はそれで「遊記」にけりをつけたようだ。ただし、(二集)9回以後が新聞に発表されたかどうか、原稿はどこにいったのかはわからない。133頁

「二編」と「二集」が出てきて不統一である。本稿では二集と称する。

劉蕙孫も厚沢と同じく、阿英のいう「1904年」初集完成説を堅く信じ込んでいる。1905年の乙巳日記にでてくる「老残遊記」は二集だという考えが彼の頭の中で定着していて動かない。どうしてもそこから抜けでることができない。その強固な信じ込みは、私が送った『老残遊記二集』の実物複写を手元においてもくつがえないのだ。

私が二集の新聞掲載は1907年だと確認している。それにもかかわらず、上記説明を見てもらえばわかるように「1905年乙巳七月初^マ[十]日『天津日日新聞』」と劉蕙孫は書かずにはいられない。くりかえす。1907年に公開された二集の実物を見ても1905年だと間違っただけを記述する。阿英の定説に振り回されているとしかいいようがない。劉蕙孫は、実物が示す事実よりも阿英の説明の方が重要だと考える。私の理解を超えている。

そればかりか、劉厚沢が提出した疑問についても無視するのである。

考えようによっては、それも無理はないか。この二集が1907年の刊行であることと、1905年の日記に出てくる「老残遊記」が初集であることが結びつかなかっただけかもしれない。初集新聞連載終了は「1904年」だとする阿英の説明は間違いで、1905年日記の第11回は初集の没書を復元したものだ、と私が指摘しても劉蕙孫は聞き入れない。自国の清末小説研究において阿英は権威である。外国人がそれに対して異議をとえ訂正しても耳に聞こえるだけで意味が理解できなかった。結果として、そうなった。

劉蕙孫は日本語ができなかったのだらう、と弁護する人がいるかもしれない。そんなことはない。彼は日本長崎に留学していた。日本語を理解するのである。

劉鉄雲乙巳日記に「老残遊記」第16回と書いてある。そこから、二集が第16回まで書かれている、と劉蕙孫は短絡し誤解した。その原稿はどこにいったのか、とまで説明する。

乙巳日記の第11回は初集没書の復元であるとかさねていう。日記の第16回は、初集の第16回である。二集は9回で中断した。それ以外は新聞に掲載されていない。いくらそう説明しても、聞く耳をもたないのだからどうしようもない。

私は、劉蕙孫を批判しているのではない。ご注意いただきたい。劉蕙孫をして実物を無視させるほどに阿英の権威が絶大であること、その呪縛から自由になることは簡単ではないことをいいたいだだけだ。

中国における阿英の権威がどのようなものであるか、この1例を見るだけで理解できるだろう。それを「阿英問題」と称して、誤りが複数あるという私の意見は、誰も聞きたがらない。私とその事実を指摘すると、中国の研究者は自分が侮辱されたように感じるらしい。研究にそのような要素が入り込むというのは、私には理解しがたいものがある。

そのほかで気になる部分がある。

「《鄰女語》評語」を第1-12回分、「蝶隱加評」と明示して収録する。ここに問題が発生する。

私が『清末小説研究』第1号(1977.

10.1)に「憂患余生著「鄰女語」第5回至第12回評語」を収録したのは、蝶隱が劉鉄雲の筆名であることを知ったからだ。第5回からの評語であることをご確認いただきたい。

雑誌創刊号の1977年という時間を見てほしい。中国で「文革」が終了したのはその前年の1976年だ。中国では学界の活動は、まだ再開してはいない。私が訪中団に参加して北京、上海に生まれてはじめて訪れたとき、刊行したばかりの『清末小説研究』を訪問先の大学関係者に贈呈した。彼らはなんの反応も示さなかった。そういう時代だ。劉鉄雲が蝶隱名義で「鄰女語」の評語を書いていたことは、当時は誰も知らない。新しい発見だったのだ。

のちにb『劉鶚及老残遊記資料』は、第5-12回分の評語を収録した。第1回からではなく第5回からを採取したのは、『清末小説研究』に従ったからだろう。

ところが、今回の『劉鶚集』は、第1、2、4回分を追加している。しかも、上に示したようにそれには「蝶隱加評」と明記する。これはいかがなものか。なぜならば、それらには「蝶隱加評」とは書かれていないからだ。掲載誌に署名がないからこそ、私は第1、2、4回分の評語を採録しなかった。『清末小説研究』には、「蝶隱加評」と明示している「鄰女語」第5回以降の評語のみを採録した理由だ。

『劉鶚集』にどうしても収録したかったのであれば、「鄰女語」第1、2、4回の評語については、「蝶隱加評」とは

書かれていないことを注記すべきであった。その点に関して不正確である。

『繡像小説』第13号^{ママ}[期]以降に発行年月を記入するのは(553-555頁)、もともと記載がないという理由で正確ではない。

『劉鶚集』(当時はこの書名は決まっていなかった)を編集していると聞いて、私は劉徳隆に知らせたことがある。新しい資料の発見につながるのではないかと考えた。該書には触れられていないから記録しておく。

「老残遊記」の原稿!?

魯迅『中国小説史略』(北京・團結出版社2005.3。254頁)である。

魯迅の該書そのものは、珍しいものではない。いまだに重版がくりかえされる。欧陽健『中国小説史略批判』(太原・山西出版集團、山西人民出版社2008.1)が刊行されたのを見ると、人気があることを逆に証明しているようにも思う。

私が注目したのは、該書に添えられた書影だ。

254頁に「《老残遊記》手稿本」と題している。2分冊。「上」冊の表紙題字は天津・孟晋書社版(『天津日日新聞』連載を単行本にした)に似ている。印も同じく「薬雨」だ。右側にひろげてあるのは「老残遊記」第13回の冒頭部分である。

写真はもともと不鮮明であるが、原稿のような印象を受ける。ただし、目をこらして文面を見ると訂正箇所がない。現存する下書き手稿とは、また異なる。私

は、過去においてこのような原稿を写真ですら見たことがない。

「薬雨」といえば劉鉄雲の友人である方薬雨のことだ。当時、天津日日新聞社の社長である。『繡像小説』の連載を中止したのち、あらためて『天津日日新聞』に連載することになったのは、彼が劉鉄雲に執筆を勧めたからだ。新聞掲載後、初集20回を同社は印刷した。発行は上に示したように天津・孟晋書社である。それには印「薬雨」がある。また二集も同紙に掲載した。

もういちどよく見る。初集20回の原稿を2冊にわけて製本してある。これは、どういう性格のものなのか。

「《老残遊記》手稿本」と書いてあるとおり原稿らしい。新聞掲載分を製本した活字版ではない。孟晋書社版の活字本であれば、私は天津で実物を見ている。こちらの原稿本2冊は、その存在そのものが不思議である。

整理しておく。劉鉄雲は、「老残遊記」を2度執筆した。

最初の執筆経過は以下のとおり。

劉大紳の証言がある。「關於老残遊記」だ。

父(劉鉄雲)がこの原稿(老残遊記)をはじめて書いて連(夢青)に贈った時は、最初の数回分であった。連夢青と商務印書館が契約を結んでからようやく継続して書きはじめた。毎晩帰宅すると、筆まかせに数枚を書き、翌朝汪剣農氏に手渡すと彼が清書して連夢青の家

仰，并见于内，而攻击官吏之处亦多。其记刚弼误认魏氏父女为谋毙一家十三命重犯，魏氏仆行贿求免，而刚弼即以此证实之，则摘发所

《老残游记》手稿本

清末小说家刘鹗著。晚清四大谴责小说之一。是作者对“棋局已残”的封建末世及人民深重的苦难遭遇的哭泣。

中国小说史略



團結出版社版『中国小説史略』掲載の《老残遊記》手稿本



天津・孟晋書社版

に届けた [翌晨即交汪劍農先生
録送連寓]。(a 『老残遊記資料』 58
頁)

ここに「老残遊記」執筆と原稿引き渡
しの手順が説明してある。

まず、劉鉄雲は下書き手稿をつくった。
その一部が現在も残っている。下書きだ
から修正箇所がある。後にこれを使って
没書になった第11回を復元したことはな
んども説明した。下書き手稿を汪劍農が
清書し(漢語の「録」をそう解釈する)、
それを連夢青が『繡像小説』編集部、す
なわち李伯元、歐陽鉅源に渡すという手
順だ。

連夢青は劉鉄雲の友人であり、しかも
「鄰女語」の著者である。この「鄰女
語」も『繡像小説』に連載されていた。
だから、劉鉄雲の書いた評語が「鄰女
語」についている。しかもその連載は、
「老残遊記」よりも先行していた。連夢
青が「老残遊記」清書原稿を李伯元、欧
陽鉅源にわたすのも不思議ではない。

汪劍農は、名を銘業といい、当時劉家
で家庭教師をしていた。劉大紳が自注で
そう説明している(a 59頁)。劉鉄雲乙
巳日記にもたびたび登場する。その記述
を見ると、彼は劉鉄雲の文書関係を引き
受けていたようだ。「老残遊記」を清書
するのも汪の仕事に含まれていたのだろ
う。汪劍農が「汪五先生」と称されてい
たことは b 『劉鶚及老残遊記資料』の注
2 (274頁) に見える。このような貴重
な注を『劉鶚集』では省略したから、私
は惜しいと感じる。

つぎは2度目の執筆だ。くりかえしに
なるがご了解いただきたい。

「老残遊記」の原稿第11回を没書にさ
れて執筆は中断した。その後、方葯雨に
よる続作の勧めがあったことは述べた。
「老残遊記」は、あらためて第1回から
『天津日日新聞』に連載をすることにな
る。

第10回までは『繡像小説』に掲載され
ているからそれを利用する。『繡像小
説』の編集者が書き換えた部分は訂正す
ればよい。没書になった原稿第11回は、
手元に残していた下書き手稿をもとし
て復元した。これが劉鉄雲乙巳(1905)
日記の第11回である。雑誌に掲載された
第11-13回は、原稿の第12-14回に当る。
こちらそのまま使用できる。第15回か
ら第20回はあらたに原稿を執筆した。

この2度目の「老残遊記」執筆過程は
間違っていない、と今でも私は考えてい
る。私が指摘して30年以上が経過した。
反論は提出されなかった。

写真の「《老残遊記》手稿本」を見る
ことができれば、天津日日新聞社に渡し
たのがどうかたちのものであったの
かをさらに一歩進めて推測する材料にな
るのだ。

写真の「《老残遊記》手稿本」第13回
は、清書原稿らしい。ということは、
「老残遊記」初集は第1回から『繡像小
説』掲載分を手元において清書しなおい
たことになる。ただし、劉鉄雲自身であ
る可能性は低いように思う。清書したの
は別人だろう。

最初の「老残遊記」は劉鉄雲が下書き

手稿を作り、それを汪劍農が清書した。
2度目の「老残遊記」執筆でも同様のこ
とをくりかえした、と推測するのが自然
だ。ただし、清書したのが誰かは、疑問
のままにするしかない。

『繡像小説』掲載分については、それ
を利用し必要な箇所には手を入れ下書き
原稿とする。復元した第11回と追加分、
すなわち第15-20回分も下書き手稿をつ
くる。それを天津日日新聞社の人間か誰
かが清書する。その清書原稿が、団結出
版社版『中国小説史略』に掲げられた写
真のものではなかろうか。

葯雨の印がある。題字を書いたのは方
だろう。方葯雨が清書したかどうかまで
はわからない。この原稿は、誰が保存し
ていたのか。こちらも疑問だ。

まさか最近作成された偽作でもあるまい。
「老残遊記」原稿の偽物をわざわざ
作る意味があるとは思えないからだ。本
物であるという前提で、この原稿そのも
のが貴重な文献である。

私は、そのように考えた。いくつかの
疑問も生まれている。ゆえに、劉徳隆に
知らせた。日本ではすすめることができ
ない種類の調査である。『劉鶚集』を編
集中の彼であれば、北京の団結出版社に
問い合わせることができるだろう。その
原稿がみつければ、これは画期的なもの
になる可能性がある。『劉鶚集』におい
て説明が加われば、それがひとつの特色
にもなる。そう期待した。だが、『劉鶚
集』には言及がない。

以上、ここに紹介しておく。誰か調べ
てくれるとうれしい。

四

【注】

- 1) 書評を書いたことがある。樽本「劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老残遊記資料』はよろしい」『清末小説論集』所収
- 2) 樽本「劉鉄雲辛丑日記について」『清末小説論集』所収

『清末小説』第31号予告

- 原原本本(二題) 范 伯群
阿英による林紓冤罪事件 樽本照雄
林譯遺稿及《林紓翻譯小説
未刊九種》評介 馬 泰來
通俗與經典的錯位 中國近代讀者
視域中的柯南·道爾、哈葛德、凡爾
納與大仲馬 郝 嵐
The Thinking Machine の中国語訳
..... 渡辺浩司
『林紓冤罪事件簿』ができるまで
..... 樽本照雄
周作人が魯迅を回想して林紓に言及する
..... 沢本香子
その他

- 『明清小説研究』2008年第1期(総第87期)
晚清《新聞報》与小説相關編年(1906-1907)
..... 陳大康
也談寅半生之“八心秋考”及其他..... 陸 林
晚清上海禁毀小説初探 孟 麗

本誌次号公開は2009年1月を予定

莎士比亞在1916年前的中國

郝 嵐

世界文豪莎士比亞在中國的情況，論者多有介紹與研究，但對於莎士比亞在中國早期的形象與莎劇的趣味問題卻少有涉及。本文論述的下限截止到1916年，一方面是因為自此以後中國文學基本開始走入新文學的軌道，另一方面更重要的在於雖然完整的莎劇中文翻譯劇本出現要到1921年，但是1916年莎士比亞劇作的演出就已經非常集中，而且在粗糙演出了幾年莎翁戲劇故事之後，第一次“與世界接軌”，將目光投向他的名劇《哈姆雷特》。這一年，徐半梅等人在上海廣西路笑舞臺公演《韓姆列王子》，導社在上海乾坤大劇院公演《篡位盜嫂》（原名叫《亂世奸雄》），同一年鄭正秋主持藥風新劇社公演幕表戲《竊國賊》，這三個劇碼故事均出自《哈姆雷特》，且都影射了袁世凱稱帝。5月笑舞臺又公演《女律師》，7月演《黑將軍》。更重要的是這一年孫毓修在他的《歐美小説叢談》中一改中國晚清以來對莎士比亞描述的浮光掠影，對其生平和戲劇進行了詳盡介紹。

隨著戲劇演出的增多、介紹外國文學

的小冊子和知識界人士對莎士比亞大力評價的出現，莎士比亞才逐漸在中國的讀者和觀眾的心目中擺脫了“述異之人”和善於描寫情天恨海的外國戲劇高手的印象，中國的讀者和觀眾開始正襟危坐地對待他，也就開始了對他的“經典化”。當把他鋪墊到足夠重要的地位時，才有了真正完整的莎評，1917年至1918年，東潤（即朱東潤，1896-1988）在《太平洋》雜誌第一卷第5、6、8、9號上連續發表四篇《莎氏樂府談》，共計兩萬餘字，詳細介紹了莎翁的成就、影響、當時的劇場、演出情況等；才有人專門翻譯了他的劇本《哈姆雷特》（1921，田漢譯），把讀者和觀眾的視線真正引入他戲劇的精華——“四大悲劇”。但是，在此之前，莎士比亞在中國的“前經典化”，對於我們瞭解剛剛放眼望世界的中國如何理解世界文學，如何對待和樹立自己的外國文學經典具有特殊的啟發意義。

但聞其聲

魯迅在上世紀三十年代談到莎士比亞的時候說：“嚴復談起‘狹斯丕爾’，一提便完；梁啟超說過‘莎士比亞’，也不見得有人注意”^{*1}，此話不留情面，但的確屬實。嚴復在光緒二十年（1894）翻譯的赫胥黎《天演論·進微》篇中，提到了“詞人狹斯丕爾”，還加了小注：“狹萬曆年間英國詞曲家，其傳作大為各國所傳譯寶貴也”。在光緒二十三年（1897）開始翻譯的斯賓塞的《群學肄言》中也數次提到莎士比亞的名字，並用“丹麥王子罕謨勒”的話佐證其觀點。在《名學淺說》中也引用莎士比亞《裘裏斯·凱撒》裏安

東尼著名演說為例，論證“名學的功能”。

除嚴復之外，梁啟超在戊戌政變(1898)之後出走日本，主編《新民叢報》。光緒二十八年(1902)在該報五月號上發表《飲冰室詩話》，其中說：“近世詩家，如莎士比亞、彌兒頓、田尼遜等，其詩動亦數萬言。偉哉！勿論文藻，即其氣魄固已奪人矣”。嚴復和梁啟超都是中國近代知識界的名人，但無奈他們對莎士比亞的舉薦並未引起國人什麼注意。

其實，這位英國戲劇家的名字來到中國，還要比嚴復提到他早得多。清咸豐六年(1856)，英國傳教士慕維廉(William Muirhead)在翻譯托馬士·米爾納(Tomas Milner)的《大英國志》(光緒七年1881年又有上海益智書會刻本)，講到伊莉莎白女王時代的文化盛況，“當以利沙伯時，所著詩文，美善俱盡，至今無以過之也。儒林中如錫的尼、斯本色、拉勒、舌克斯畢、倍根、呼格等，皆知名士”。“舌克斯畢”就是莎士比亞。光緒八年(1882)北通州公理會又刻印了美國牧師謝衛樓所著的《萬國通鑒》，其中也提到莎士比亞：“英國騷客沙斯皮爾者，善作戲文，哀樂罔不盡致，自侯美爾(現譯荷馬)之後，無人幾及也”。

戊戌政變前後，莎士比亞的名字更頻繁地被介紹進來。光緒二十二年(1896)上海著譯堂書局翻印了一套英國傳教士艾約瑟在1885年編譯的《西學啟蒙十六種》，在《西學略述》一書的《近世詞曲考》中介紹莎士比亞：“英國一最著聲稱之詞人，名曰篩斯比耳。凡所作詞曲，於其人之喜怒哀樂，無一不口吻逼真。加以閱歷功深，遇分譜諸善惡尊卑，尤能各盡其

態，辭不費而情形畢露”。1903年上海廣學會刊印的英國傳教士李提摩太主編的《廣學類編》(Handy Cyclopedia)、上海石印本《東西洋尚友錄》和《歷代海國尚友錄》，1904年上海廣學會出版的英國傳教士李思·倫白·約翰輯譯的《萬國通史·英吉利志》、10月出版的《大陸》雜誌中的《希哀苦皮阿傳》中對這位英國文豪都有提及。此外在傳記中介紹莎士比亞的還有光緒三十三年(1907)世界社出版的《近世界六十名人畫傳》中的《葉斯壁傳》，光緒三十四年(1908)山西大學堂譯書院出版的《世界名人傳略》中也有《沙克皮爾傳》*2。

算起來，莎士比亞的“大名”聲震中國的日子確不算晚，但是譯名如此多樣，很難有人意識到他們說得是同一個人，加上中國文人對外國的認識還沒有超越泰西文學藝術“不逮中華遠甚”*3的階段，因此莎士比亞的大名真的被中國人注意還要等到林紓翻譯了蘭姆姐弟的書之後。區別在於值得注意的是，林紓的翻譯“在普通讀者中廣泛傳播，而早期改革者對莎士比亞的意識形態化塑造卻只在一小撮知識精英中略有影響”*4。考慮到二十世紀初葉的中國知識精英的數量是如此之少，因此，林譯莎士比亞對於我們的研究就具有特殊價值。

蘭姆、林紓與“述異之人”莎士比亞

1807年，蘭姆姐弟(Mary Lamb, 1764-1847; Charles Lamb, 1775-1834)將莎士比亞的二十個戲劇改寫成故事，書名叫做《莎士比亞故事集》(Tales from Shakespeare)，以兩卷本的形式出版，副標題是“為年輕

人而作”。

查爾斯·蘭姆算是忠實的“莎翁迷”，而且還是絕對狂熱的“惟劇本論者”。他的《關於莎士比亞的悲劇及其上演問題》在莎學界非常有名。蘭姆把作家的劇本和演員的表演看作是截然不同的性質，在他以為，演員們把它們拙劣的朗誦出來的能力和劇作家創造詩的想像力、把這些意象化為文字的能力根本不可同日而語。那些戲子為了娛樂觀眾的低級趣味怎麼能與戲劇詩人對人類心靈的高貴把握相提並論呢？於是蘭姆厭惡莎劇依靠演出推廣，他寧願將原來的戲劇編成故事集。他編書的目的有兩個，一個是美德的教化作用：讀了莎士比亞能使年輕人“拋棄一切自私的、唯利是圖的念頭；這些‘故事’教給他們一切美好的、高貴의思想和行為，叫他們有禮貌、仁慈、慷慨、富有同情心”；另一個是誘使讀者有興趣真正去閱讀莎翁的原作，“倘若年輕讀者有幸從中嘗到一些樂趣，我們希望起碼也會使他們巴不得自己再長大些，以便原原本本地讀到原劇”^{*5}。但吊詭的是，當他批評別人可能會“保持故事的原有梗概，而略去其中所有的詩意，——莎士比亞神聖的標記，他的偉大才智”時^{*6}，他不知道他的故事集在中國幾乎就是產生了這樣的效果。

林紓並不是第一個將此書翻譯成中文的人。比他早一年，光緒二十九年(1903)上海達文社首先用文言翻譯出版了這本書，題名是英國索士比亞著《瀨外奇譚》，譯者沒有署名。但從書的名字看來，這不過是個海外的奇異故事集。對於讀慣了《閱微草堂筆記》或者《聊齋志異》的中

國讀者來說，此書也算不得多麼了不起，因此也沒有引起太多注意。《瀨外奇譚》挑選翻譯了十個故事，各成一章，採用章回體小說的題目和形式。分別是《蒲魯薩貪色背良朋》(《維洛那二紳士》)，《燕敦里借債約割肉》(《威尼斯商人》)，《武歷維錯愛孿生女》(《第十二夜》)、《畢楚裏馴服惡癖娘》(《馴悍記》)、《錯中錯埃國出奇聞》(《錯誤的喜劇》)、《計上計情妻偷戒指》(《終成眷屬》)、《冒險尋夫終諧伉儷》(《辛白林》)、《苦心救弟堅守貞操》(《一報還一報》)、《懷妒心李安德棄妻》(《冬天的故事》)、《報大仇韓利德殺叔》(《哈姆雷特》)。

該書出版之後的第二年，商務印書館又出版了林紓和魏易用文言翻譯的《英國詩人吟邊燕語》，列為《說部叢書》之一。這時候的林紓已經借著《巴黎茶花女遺事》的翻譯聲名遠播，“林譯”也已經成了文學市場的一個小招牌。林紓不僅與人合作口述筆錄小說，而且樂於在小說之前寫敘，對作品加以微言大義的著名“導讀”。在《吟邊燕語》的序中，他將莎士比亞與哈葛德(Sir Henry Rider Haggard, 1856-1925)相提並論。

這位在英國難登大雅之堂的通俗小說作家在近代中國可是一位風雲人物，《吟邊燕語》出版的時候正是哈葛德在中國聲勢上升的時期，1906年之一的《月月小說》創刊號上甚至赫然使用了他的頭像，他的地位儼然等同于世界文豪，因為同為晚清四大小說雜誌的《新小說》和《小說林》的創刊號分別選用的是托爾斯泰和雨果。

莎士比亞竟然還要借哈葛德的餘光，

原因當然是因為林紓有限的英國文學視野，以及中國當時獨特的世界文學眼光。林紓說這兩個人的作品都與神怪有關，“莎氏之詩，直抗吾國之杜甫；乃立義遣詞，往往托象於神怪”。估計他存此印象與《暴風雨》、《仲夏夜之夢》、《馬克白》、《哈姆雷特》等故事中的超驗因素有極大關係。但林紓用來給普通讀者導讀的“序”，落腳點在於感歎像這樣的“禁蛇役鬼”，向來以新為政的英國人都“不廢莎氏之詩”，中國人卻一力求新，“維新之從”。為什麼呢？林紓悟出“蓋政教兩事，與文章無屬。政教既美，宜澤以文章。文章徒美，無益於政教”^{*7}，所以中國的關鍵還是抓緊強國。由此看來，蘭姆苦心讓讀者讀出的“美德”至少最初沒有在二十世紀初葉的中國找到迴響。

蘭姆的小冊子使中國人首次瞭解了莎士比亞的相關作品。從蘭姆的初衷來看，把它作為“啟蒙讀物”倒也恰當，但關鍵是莎士比亞在當時的中國只是“但聞其聲”，沒有具體作品，只說這個英國“詞人”如何重要，普通讀者也無非是以為他枉擔了虛名，或者根本就沒什麼印象。又或者，即使蘭姆的目的順利達到，中國讀者想要去讀他的劇本也找不到，真的劇本的全譯本到來要等1921年田漢譯的《哈孟雷特》，發表在《少年中國》雜誌。

無論是《瀨外奇譚》還是《英國詩人吟邊燕語》都把作者蘭姆錯誤的直接寫成了莎士比亞，還把這部作品歸入“說部”。《瀨外奇譚·敘例》中寫道：“吾國近今學界，言詩詞小說者，亦輒嘖嘖稱索氏。然其書向未得讀，僕竊恨之，因亟譯述是編，冀為小說界上，增一異彩”。

譯者很明顯仍然把莎士比亞放在了“小說界”，而且證明在此之前國人的確不曾見過他的“詞曲”如何。其實從蘭姆原著的性質來說，倒也沒什麼不對，只是這影響了莎士比亞作為戲劇家的大名。譯壇名將林紓後來又翻譯了一系列署名“莎士比”的作品：1916年（民國五年丙辰）4月商務印書館出版了“林譯小說第二集第十五編”《亨利第六遺事》，屬“英國莎士比原著”，“閩林縣紓、靜海陳家麟同譯”，在同一年，林譯還出版了《雷差得紀》、《亨利第四紀》、《凱徹遺事》，在他死後一年的1925年，商務還出版了單行本《亨利第五紀》。這些作品，據樽本照雄教授考証，並非譯自莎翁的劇本，而是譯自奎勒·庫奇（A. T. Quiller-Couch）出版于1899年的 *Historical Tales From Shakespeare*^{*8}。林譯莎士比亞的歷史劇原本就是莎劇的故事縮寫，譯文仍然故事化、少對白、通篇不分段、不加標點、以敘述人口吻講述對話等等。由於這樣的形式，將莎翁的名劇列入“林譯小說”叢書也就沒什麼不妥。

在林紓對莎士比亞進行了影響頗廣的譯介之後，莎士比亞的主要面貌並不是一位偉大的戲劇家，仍然是一個講故事的，還是一個講“鬼怪故事”的英國人。直到很久以後的三十年代，顧燮光在《譯書經眼錄》中評價林譯的《英國詩人吟邊燕語》：“譯筆復雅馴雋暢，遂覺豁人心目。然則此書殆海外《搜神》，歐西述異之作也夫”^{*9}。不過，無論如何，作為一位相對陌生的外國文豪，這樣一個故事化的莎士比亞倒是更容易拉近其與中國讀者的距離。

直到1914年，還有人認為：“歐西戲

劇感人至深，及考其由，則文學家編一劇，先播傳其劇本於世，若干日後，則劇場始取而演之，故觀者之腦海中有一極深之印象而得其感征之力，社會教育製成所由起也” *10。這位中國文人認為外國戲劇家都是先寫個故事流傳，然後才排演戲劇的。從這個意義說，莎士比亞在中國的流傳倒是比較符合這個規律，與他在英國時戲劇活躍於舞臺，劇本卻久久不見流傳的情況恰好相反。而我們把戲劇混同於小說，至少證明中國早期戲劇意識規範的模糊。在這樣一個大環境裏，戲劇家莎士比亞陰錯陽差地先以一個講故事的“述異之人”的身份與中國人謀面了。

演出的通俗化與中國趣味

中國人與莎翁這樣的一個邂逅頗富意味，因為正是這樣一個“故事化”的莎士比亞拉開了中國莎劇與莎學的大幕。這很大意義上影響了莎士比亞在中國的早期面貌。

20世紀初，中國的所謂莎劇演出多採用“文明戲”的方式，這種“文明戲”是我國話劇在傳統戲曲的基礎上吸收西洋話劇逐漸發展而成的一種戲劇樣式。這類演出沒有劇本，只是靠一個敘述故事梗概的幕間說明，也沒有臺詞，頂多只是注上幾句劇情要求必須說的話，其餘全憑演員即興發揮和表演。據說排戲時，導演的作用只是召集演員，介紹情節和上下場次序，安排角色，剩下的就全看演員的本領了。這樣的演出並沒有原始的記錄可資查明，今天的認識全憑早期戲劇前輩的回憶和描述*11。中國話劇發軔期這種簡陋的方式，決定了他們對劇本要求的鬆散，於

是才與林譯蘭姆的莎士比亞故事一拍即合。

劇本未到，並不影響演出先行。早在蘭姆的書被譯介過來之前的1902年，上海聖約翰書院（今上海政法學院）的外語系畢業班就演出了《威尼斯商人》，用的是英語。英國戲劇家威廉·道拜爾撰寫的《中國戲劇史》，收有此次演出的劇照一幅*12。

中國人用漢語演出莎士比亞的戲劇要到1913年，有意味的是，演出的劇碼也是《威尼斯商人》。該年年初，上海城東女子中學演出《女律師》，全部由女子反串男角，而這一年的7月，鄭正秋領導的文明職業劇團新民主社採用幕表劇公演話劇《肉券》（劇名相信正是來源於林譯，他在《吟邊燕語》中將《威尼斯商人》的故事譯為《肉券》）。12月9日-23日，春柳同人吳我尊等人與湘春園漢調戲班在長沙壽春園演出《馴悍》等劇。1914年新劇同志會在上海寧紹碼頭競舞臺公演《女律師》，新劇家陸鏡若主持的春柳劇場演出《鑄情》、《馴悍記》、《倭塞羅》。1915年5月12日（舊曆），民鳴社在上海大新街三馬路中舞臺演出話劇《借債割肉》。

到1916年，中國舞臺上演出最多的莎翁戲是《威尼斯商人》，共有5個戲劇團體的演出記載；其次是《馴悍記》和《鑄情》，都是兩次。從名稱看它們的底本大多很有可能也是林譯的《吟邊燕語》，雖然後來的劇本很難說也與《吟邊燕語》有關，但至少他們的底本也只是故事梗概，人物名字中國化，對話非常簡單，帶有初期話劇幕表劇的性質。當時這些翻譯的戲劇底本很少出版發表，今天也

幾乎找不到原有的翻譯文本。不過也有例外，比如包天笑編譯的《女律師》，劇名當然是來自劇中喬裝明斷的女主角鮑西亞，但內容也有了很大的改變，刪改很多。此劇發表于《女學生》1911年第2期。

這裡值得一提的是，據最新的發現表明，1914年9月到1915年11月的《女鐸》雜誌上連載了署名為“泰西名劇《剝肉記》，英國莎士比著，美國亮樂月譯”。譯作共五幕一節，和原劇的敘事結構一致，只是在內容上有調整和壓縮。但難得的是，《剝肉記》保留了基本的戲劇形式，劇中的幾幕曾在匯文學堂的畢業禮中有學生排演過*¹³。盡管如此，此譯本仍然采用了意譯的方法，情節刪削嚴重，對白口語化，人名中國化，而且它連載在《女鐸》雜誌上的“小說”欄目中。這仍然表明近代中國莎翁戲劇翻譯的故事化。

在英國，無疑《威尼斯商人》中的鮑西亞和夏洛克是劇中最出風頭的兩個人。伊莉莎白時期，民眾對吝嗇的猶太人存有根深蒂固的偏見，所以鮑西亞常成為此劇的核心人物，到了十九世紀夏洛克卻躍升為主角。歷來對這個猶太人的處理方式有很多種：兇狠的魔鬼、滑稽的惡棍、委屈的受歧視者……現代人已經不再簡單地看待這個人物了。雖然當時的演出沒有留下什麼記錄，但中國早期的話劇舞臺喜歡這出戲與種族問題絕無關係，倒是可能對女扮男裝這一情節設置情有獨鍾，或者這樣的懲戒惡人和峰迴路轉更符合《三言二拍》等市民小說培養出來的觀眾趣味。

在中國早期上演次數僅次於《威尼斯商人》的《馴悍記》帶有很多的喜劇成

分。蘭姆姐弟縮寫的《馴悍記》只是選取了原劇三個故事線索中彼特魯喬和凱瑟麗娜的故事，這是莎士比亞筆下最有趣的歡喜冤家之一。該劇臺詞具有部分的笑劇成分，劇情發展新奇機智。到十八世紀這個劇本已經有七種不同版本。而到了現代，馴服女人這樣的主題開始讓很多西方人不以為然，倒是和《巴思婦的故事》相映成趣。不過，似乎這部戲劇的喜劇場面非常適合趣味不高的中國早期舞臺，在新女性解放運動如火如荼之前還有生存的空間。

而《羅密歐與茱麗葉》一直是莎士比亞最受歡迎的劇作之一，雖然不如四大悲劇成熟，但是愛情真摯，衝動自然，已經隱隱蘊含了莎士比亞揭示人性弱點在外部環境的驅使下釀造悲劇的框架。但是，對於剛剛接觸外國新劇的中國觀眾來說，還無暇細細品味莎劇中深厚的人性主題，只是把它看作一個單純的愛情故事也未可知。這樣一個自由衝動的情感故事，慘烈、情節起伏大，似乎恰恰因為其一改中國過去才子佳人故事總是大團圓的傳統而吸引了中國觀眾。在與票房緊密掛鈎的戲劇舞臺，這一點當然更重要。

儘管中國戲劇的先鋒們把社會教育之功作為新劇的首要大意，但是早期那種“滿口灑血”的化妝演說，宣傳活報劇式的“新劇”，在辛亥革命高潮過後，很快失去觀眾，隨之而來的“家庭戰”的繁榮，使得具有“家庭劇”因素的外國劇碼受到歡迎：善惡有報的道德感、智夫馴悍婦的家庭場景或者亙古不變的堅貞愛情自然成為首選。當然也不能忽視喬裝改扮的噱頭、插科打諢的滑稽。因為無論理論家如何宣導，無奈觀眾看戲自有目的，還不

要說中國早期舞臺上的莎翁戲還未必有多少“戲味”，因此“新劇團體既持看客而能生存，故看客心理所好何劇，則何劇投之，固不必假社會教育四字作假面具也”^{*14}。

即使到了1916年，中國人對莎士比亞已經有了些許瞭解，但與世界文豪的劇碼同台演出的都是些《綠窗紅淚》、《劫後姻緣》、《福爾摩斯》等言情偵探之類的戲（他們當時都上演於上海的笑舞臺）。不過，既然找不到演出的劇本，看看當時報上的廣告也是一種告慰。《民國日報》1916年5月25日介紹《女律師》“此本莎翁名劇，借債而要割肉，女子而做律師，文情並茂，妙趣橫生”。1916年7月17日說《黑將軍》（《奧賽羅》）：“一標誌女郎，偏不與漂亮少年結婚，而獨與身黑須黑的黑將軍結為伉儷，致弄出許多情天孽障，趣味之濃為莎劇中第一名”。1916年3月11日《竊國賊》（《哈姆雷特》）的廣告是：“為人臣而竊君竊國，私通君後；為人弟而盜嫂盜政權。父仇不共戴天，而母且夫事乎殺父之仇，不得以裝瘋作戲，以娘心，到頭來大家難逃一死，此其慘為何如慘”。看看這樣半文不白、半通不通的廣告，想想當時那自由度無限之大的演出形式，足以看出莎士比亞在早期的中國是如何地帶有趣味性和娛樂故事性。蘭姆若地下有知，不知道會不會從墓穴中跳將出來，繼續罵這些中國演員如何把莎士比亞深邃的思想和讀者閱讀中的快感“貶低到物質化的有血有肉的標準”。不過，莎士比亞在中國的這種“前經典化”，其接受和演出其實仿佛更符合伊莉莎白時代戲劇的自由化和娛樂化。

㊦

【注釋】

- 1) 魯迅：《“莎士比亞”》，《中華日報·動向》，1934年9月23日，後收錄于《花邊文學》。
- 2) 以上材料參見《莎士比亞作品在中國》，戈寶權，《莎士比亞研究·創刊號》中國莎士比亞研究會編，杭州：浙江人民出版社，1983年3月，第332-336頁。
- 3) 郭嵩燾：《使西紀程》，見《倫敦與巴黎日記》，嶽麓出版社，1984年，第119頁。
- 4) Li Ruru, *Shashibiya: Staging Shakespeare in China*, Hong Kong University Press, 2003, p.17.
- 5) 查理斯·蘭姆、瑪麗·蘭姆改寫，蕭幹譯，文潔若校注：《莎士比亞戲劇故事集（上）》，商務印書館，1984年，第6-7頁。
- 6) 張可、元化譯：《莎劇解讀》，上海教育出版社，1998年，第191頁。
- 7) [英] 蘭姆著，林紓譯：《吟邊燕語》，商務印書館，1981年，第1頁。
- 8) 參見樽本照雄：《林紓冤罪事件簿》，清末小說研究會，2008年，第249-260頁。
- 9) 杭州金佳石好樓1935年刊印，卷七11頁，亦收阿英編《晚清文學叢鈔·小說戲曲研究卷》。
- 10) 倦鶴：《新劇考·序一》（第一集），中國圖書館，1914年，第1頁。
- 11) 見歐陽予倩《談文明戲》，《中國話劇運動五十年史料集》第一輯，中國戲劇出版社，1958年，第88-91頁。
- 12) 資料參見孟憲強《中國莎學簡史》，

東北師範大學出版社，1994年，第161頁。

- 13) 參見朱静《新发现的莎劇《威尼斯商人》中訳本：《剗肉記》》，《中国翻譯》第26卷第4期2005.7
- 14) 仲賢：《不必假社會教育名義》，見《新劇史・雜俎》，新劇小説社，1914年。

晚清小説作者扫描(拾陸)

武 禧

清末小説から

- 莊 浩然 閩籍近代学者与莎士比亚 『福建師範大學學報(哲学社会科学版)』2005年第3期(總第132期) 2005.5.28
- 沈 慶会 談《迦因小伝》訳本の刪節問題 『華東師範大學學報(哲学社会科学版)』2006年第1期(第38卷第1期) 2006.1
- 樽本照雄 陳広宏訳 联系劉鉄雲与李伯元的紐帶 『中国学研究』第8輯 濟南出版社2006.5
- 欧陽 健 “白話文学正宗”論檢討 兼評林紓“古文之不宜廢”論 欧陽健's Blog「古代小説与人生体験」掲載 原創2006.5.29 轉載林紓文化研究所ホームページ2008.6.6
福州近代的文化巨人林紓在晚清 『閩江学院學報』2007年第4期 2007.8.15
福州近代的文化巨人林紓在民国 『閩学院學報』2007年第6期 2007.12.15

(零七四)

寿臣氏

小説創作：《射雕記》

寿臣氏：《射雕記》作者署名“日本国寿臣氏”。应是日本人，但不见任何著作录，待考。

关于“寿臣氏”除《中国通俗小说总目提要》以为“谓寿臣氏居住日本春申浦，号两楼主人，似为伪托”外未见任何介绍讨论文字。中日两国以“寿臣”为名者，不乏其人，但都非“寿臣氏”。笔者所见文字中用“寿臣氏”者有二：一、以“寿臣氏”为照相馆名，原文如下：“照相馆中的‘月宫’与‘寿臣氏’，一以嫦娥仙子，一以寿臣人氏来形容留影之人，真可谓别出心裁”。“寿臣人氏”不知做何解释。若此“寿臣氏”似有典故在其中，惜笔者不能解。二、2004年北京瀚海拍卖公司拍卖著名画家傅抱石书《后赤壁》扇面，其扇骨有寿臣氏刻“松鹤延年、寿天百禄”。

(零七五)

栖溟啸园

小説創作：《日中露》

栖溟啸园：笔者所见著录均无。待考。

(零七六)

东海觉我

小说创作：《情天债》《新法螺》《新法螺先生谈》《未来中国之图书同盟会》

小说翻译：《海外天》《黑行星》《美人妆》《新舞台》《新新新法螺天话》《星期日》《英德战争未来记》《莫儿多群岛记》

小说注解、润词、跋语、校对：《买路钱》《魔海》《禽海石》《入场券》《苏格兰独立记》《外交秘钥》

东海觉我：徐念慈（1874-1908），江苏常熟人。原名燕义（一写燕义），字念慈，以字行，改字彦士，号初我，别号觉我、东海觉我。近代文学家、翻译家。通日语、英语，擅长数学。早年就读于江阴南菁讲舍，曾任教于常熟蒙养学堂，入兴中会，创办速成算学社与竞化女学。与蒋维乔合办尚公小学。光绪二十七年（1901），组织教育同盟会，又任中国教育会常熟支部负责人。光绪三十年（1904），任上海小说林社编辑主任，并任《小说林》杂志译述编辑，以误服药物而卒。与著名翻译家周桂笙齐名，被称为我国近代翻译的开拓者。译书态度严谨，忠于原著，尤注意介绍西方科学文化。译有美国科幻小说《黑行星》、日本小说《新舞台》、英国小说《海外天》及《英德战争未来记》等。译文均为白话或浅近文言，通俗易懂。著有科幻小说《新法螺先生谭》，并主编《博物大辞典》。另撰有小说论文《小说林缘起》《〈第一白十三案〉赘语》《余之小说观》，根据黑格尔、康德等人的美学观探求小说的特性，强调小说与社会人生的联系。

(零七七)

张茂炯

小说创作：《万国演义》

张茂炯：（? - ?）江苏吴县人。字仲清，自署艮庐，艮庐居士。父张祥甫，有兄二，仲和，仲温。子张达夫。自幼“生长于西湖”。1904年参加最后的科举考试，中二甲第六名。试题中有1、“泰西外交政策往往借保全土地之名而收利益之实。盍缕举近百年来历史以证明其事策”。2、“日本变法之初，聘用西人而国以日强，埃及用外国人至千余员，遂至失财政裁判之权而国以不振。试详言其得失利弊策”。1913年中央政府明令各省一律设立国税厅筹备处直属于中央财政部，办理全省国税征收事宜，张茂炯任安徽省国税厅筹备处处长。1915年曾重访杭州。袁世凯复辟帝制，曾授张茂炯为中国银行正监督。与曲学泰斗吴梅友善，撰《霜厓三剧·序》。1929年7月，与邓邦述、顾巍成、吴渊叔、吴梅等九人结“六一消暑词社”，或在鹤园、或在怡园彼此吟咏以为乐，前后历时三月，集会九次。约在此时为苏州狮子林小方厅撰联“狮子窟中岚翠合 细林仙馆鹤书频”。著名画家吴湖帆在张茂炯所画扇面“湖山一钓图”题“湖水一曲，出人约游处也”。胡适作《〈三家注史记〉札记》曾引用他有关论述。编印有《艮庐自述诗》《艮庐词续集》《艮庐词外集》自云“五十始学词”，后人评价其词“生硬艰涩，短钉不通，无病呻吟、搔首弄姿，穿凿凑合，不知所云，几无一首可以本读”。编著有《清盐法志三百卷》。

张茂炯为近代财政方面有一定建树的人物，但记录寥寥。《中国词学大词典》或有记录，惜笔者未见。淮安朱德慈先生对近代词家生卒年多有考证，亦曾提及张

茂炯，亦未见。

(零七八)

蕊卿

小说创作：《血痕花》

蕊卿：夏循培（？-1924）浙江杭州人。字爽夫，号蕊卿。其祖父夏同善为光绪帝师，曾为“杨葛（小白菜）冤案”平反昭雪。父（叔）夏偕复，兄（从兄）夏循坦，有女名夏好文生于1910年。蕊卿早年留学日本。1913年曾被工商部派往日本调研考察商标法令的制订。1914年-1917年任农商部参事，1923年以商会会办的身份参加在北京农商部参事会议厅举行的我国第一个商标局成立大会。1918年-1924年任四川实业厅厅长。

(零七九)

春心

小说创作：《忘国恨》

春心：笔者所见著录均无。待考。

(零七九)

冷情女史

小说创作：《洗耻记》

冷情女史：笔者所见著录均无。待考。 ㊦

中国近代文学研究『留得』第22期(2008.4)が刊行されました。第23期(2008.6)は、張永芳特集です。

清末小説から

范 伯群（『姚鵠雜文集』）序言 『姚鵠雜文集』小説卷全2冊 上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社 2008.4

史修永、陳龍 林紓翻訳小説の文学視野与文化立場 『齊魯學刊』2007年第1期（總第196期）2007.1.15

郭 武群 『打開歷史的塵封 民國報紙文藝副刊研究』天津・百花文藝出版社 2007.9

陳 平原 視野・心態・精神 如何与漢學家對話 台灣『中國文哲研究通訊』第17卷第4期 2007.12 「二十一世紀的漢學對話」專輯

上海圖書館編 『中國近現代話劇圖誌』上海科學技術文獻出版社2008.1 上海圖書館歷史文獻研究叢刊

付 建舟 『小説界革命的興起与發展』北京・中國社會科學出版社2008.3

松田郁子 「電術奇談」翻案から『情變』改作まで 清末における恋愛小説試作 關西大學『中國文學會紀要』第29号 2008.3

齋藤希史 『申報』の文學圈 『瀛寰瑣記』創刊前後 『吉田富夫先生退休記念中國學論集』汲古書院2008.3.1

若杉邦子 年画師・呉友如について 同上

竹村則行 鄧梅羹『中國文學史綱』と譚丕模『中國文學史綱』併せて新発見の劉復の佚序について 鄧梅羹『中國文學史綱』上海・神州國光社 1932.4 / 1933.11再版 / 竹村則行影印私家版2008.3.3

俞 子林 上海福州路文化街概述 『出版史料』2008年第1期（新總第25期） 2008.3.25

勝山 稔 見捨てられたパイオニアの遺産 井上紅梅は中國小説研究史に何を残したのか 『東方』第329号2008年7月2008.7.5

郭 長海 吳曉峰主編『中國近代文學史証 郭長海學術文集』上下冊 長春・吉林人民出版社2005.3